

・OUR BEST SHOOT!

病院での毎日の「お!」という瞬間を切り取りました!

同僚の結婚式にて



明日があるさ



こんにちは、
あやめさんです♡



はやく
おもちゃ投げて!



ニはる パグ 16才の女の子



なでなで、
お尻ポンポン大好き♡

ぼくと
遊べ!

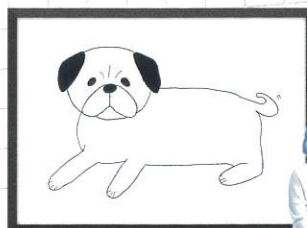
似顔絵
選手権



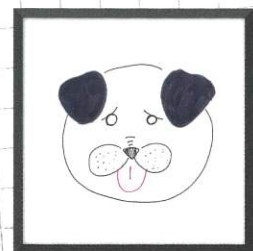
だて/獣医師
中川 雄太さん



やさか/獣医師
尾崎 万穂さん



だて/ケアスタッフ
田中 亜実さん



やさか/ケアスタッフ
稲谷 咲子さん



だて/トリマー
豊福 久美さん



やさか/獣医師
梶谷 あかねさん

「今回のお題」パグ

制限時間15分! 仕事でしよちゆう会っているから、
何も見なくても描けるハス! 両院の画伯(?)が腕を振ります。

One VET 社内報「太郎通信」Vol.1 2023年3月発行 発行人: 大石太郎
編集/発行 One VET 広報課 〒700-0073 岡山県北區万成西町15-27 TEL: 086-251-0959

太郎通信

創刊号

特集
「太郎通信」創刊に寄せて



はじまるよ

Vol. 1
March, 2023

鼎談

「太郎通信」創刊に寄せて

Taro Oishi × Narihisa Date × Kento Koide

やさか動物病院とだて動物病院をつなぐ架け橋として、社内報「太郎通信」が創刊された。
どういう思いで創刊に至ったのか、どんなものにしていきたいのか、
大石太郎院長と伊達成寿院長、広報部アドバイザーの小出健人氏に語り合ってもらった。



Taro Oishi

OneVET 内の距離感を密にするツールを作りたい

——社内報創刊の背景を教えてください。

大石 最初に「社内報を作りたい!」って言いたしたのは、伊達先生だったよね。

伊達 だね(笑)。「やさか動物病院」(以下「やさか」と「だて動物病院」(以下「だて」)が合併して約3年になるけど、コロナの影響もあって、両院がいわゆる「セッション」できるような機会があまりなかったの、お互いの距離感をもう少し密にするためのツールがあればいいなと思ったのがきっかけかな。

創刊に対する思いは、きっと僕と大石先生とでは、似ているところも違うところもあると思うんだよね。「だて」の立場から言うと、以前は病院の規模が小さくてスタッフも少なかったの、自然とアットホームな雰囲気になっていたんだけど…。病院自体が急激に大きくなってスタッフが増え、飼い主さんからの治療や技術への要求が高まったことで、仕事自体がシビアになってきているという現状があって。従業員同士の距離感が、物理的にも精神的にも開いてきているな…と感じていたんだよね。だから、僕自身も含めたスタッフ同士の距離感を縮めるツールといった意味でも、社内報は役立つのではないかなと考えたんだ。

大石 「やさか」の場合は、スタッフ同士の距離は近いんじゃないかな。ただ、「仕事に対するプライド」という面では、「だ

自分たちの方向性を、さまざまな角度から伝えられるツールが欲しかったんです

て」から学ぶことがとても多いなと感じている。

というも、実は僕、院長になって間もない頃に、スタッフに少し厳しく指導したら辞められてしまったという経験があって。それからは、なるべく優しく接するように心掛けているんだけど、院内の居心地はよくなった半面、「仕事に対する姿勢」という点では、しっかり伝えきれていない部分があるんじゃないかと…。そういった面で、伊達先生は僕の対極にいるような人間だと思うので、社内報を通じて、「だて」の皆さんから「やさか」に刺激を与えてもらえるんじゃないかと期待もしてるんだよね。

——小出先生は、このお話を聞いた時にどう思われましたか？

小出 とにかく「新鮮だな!」と思いました。そもそもこの業界で広報誌を発行しているところは、まだほとんどなくて、飼い主さん向けに出している事例をたまに聞く程度なんです。それを、あえて「社内に向けて作る」というのが斬新だなと。

伊達 両院の交流につながったからね。

小出 社内報の創刊に向けて両院のスタッフにいろいろ話を聞いてみると、従業員同士の普段の話題が、「だて」は仕事、「やさか」はプライベートが多い印象で、両院は結構対照的だと感じたんです。社内報によって両院それぞれの状況を可視化することができれば、お互いを知ることができるし、「だて」にとっても「やさか」にとっても、自分たちが今まで見えていなかったような部分を見つめ直すきっかけになるんじゃない

かと思っています。

「自分たちの思い」を共有することが、PRにも

——小出先生から、両院の現状を踏まえた社内報への期待が語られましたが、お二人はどのようにお考えですか？

大石 経営面から話すと、「毎年行っている経営指針の説明会以外に、いろいろな角度から方向性を伝える場があったら面白いな」と、常々思っていて。それぞれの病院での会議も、もちろんそのひとつだけれど、それだけではなく、自分たちの方向性をもっと広い視点で、堅苦しくなく確認できるツールがあってもいいなと。そういった意味でも、社内報は活用できてると思う。

伊達 僕、大石先生って、本当に勉強熱心だと思うんだよね。経営の知識も豊かで、きっと周りの人が思う何倍も精進しているんだろうな。ただ、不器用な人なので伝え方が真っ直ぐすぎて…結構硬いんだよね(笑)。配布する資料も、「これ、誰か読むかな?」と思っちゃうような。受け取る側に「面白いな!」とか、「キレイだな!」とか、そんな風に感じてもらえるようなツールがあれば、大石先生の思いがもう少し周り

の人たちに拡散できると思うよ。

経営面から言えば、さっき小出君も話してくれたように、僕も「社内報を発行する」という活動自体が、この業界においてとても面白い試みだと思っていて。「岡山の2つの動物病院が、OneVETという会社を設立し、他院に先駆けて、自分たちの思いを社内でも共有する活動に熱心に取り組んでいる」ということがこの業界で話題になれば、リクルートを含めた社外へのPRにもつながるんじゃないかと。例えば、「うちはこんな会社です」と外部の人や学生さんたちに伝える時に、経営指針よりこの社内報を渡すほうが、「わぁ、なんだか楽しそう!」と感じてくれそうじゃない? そのためにも、まずはおしゃれな感じの社内報にしたいよね(笑)。

小出 本当にそう。「経営者の思いを伝えたいけれど、なかなか伝える場がない」ということが、この社内報を作るひとつのきっかけではあったけれど、せっかく思いを伝えるツールを作っても、受け手に読んでももらえなかったら意味がないので。読み手にとってなるべく魅力的な企画を、今、広報部隊のメンバーと一緒に考えているところです。

大石 広報部隊は「やさか」と「だて」の両方のスタッフで構成している社内報制作チームで、いろいろと企画を考えてくれているメンバーに、僕は本当に期待してるんだよね。このよ

病院同士、スタッフ同士の距離感を縮めるきっかけにもしたいね



Narihisa Date

在なんだよね。だから、対外的な視点から考えても、例えば「OneVET 通信」にするよりも、「太郎通信」のほうが、業界にも印象づけやすいんじゃないかという狙いもある。『あの『太郎』の病院が、面白いことやってるな』というように。

小出 なんか語感もいいですね。「タロウ」って(笑)。——「太郎通信」という誌名は、そうなってしかるべきものだったんですね。

小出 ただ、広報部隊が完全に大石先生、伊達先生の側に立って誌面を作ってしまうと、自己満足になってしまう。だから、広報部隊メンバーと活動する時は、お二人の思いは汲みつつも、なるべく情報の受け手側の立場で考えるようにしています。例えば、「経営者の思いを伝えたい」という点についても、「いやいや、なんか、重たいし、長いですよ…」と読者が感じるのを前提にして考える…みたいに(笑)。

大石 その視点はありがたいね。

小出 だから、ミーティングでの発言が多少自虐的になる時もあるかもしれません。でもそれは、先ほども話したように、「伝わるのが何より大切」であって、そのために、まずは魅力ある設計にしていくことが大事だと思っているからなので。お二人と、スタッフや受け手側との間のバランスみたいな感じになれたらいいなと考えています。

伊達 …なんだか、涙が出そうになるね。

大石 小出君を捕まえてて、よかったね(笑)

「私も出たい!」と思われるような社内報を目指して

——誌名も決まり、創刊した訳ですが、今後はどのような社内報にしていきたいですか？

小出 広報部隊の立場で言うと、経営者の思いを伝えるだけでなく、「やさか」と「だて」の2つの病院が、「お互いどんなことをしているのか分からない」というところを、可視化していくことにも取り組んでいきたいと思っています。

大石 例えば、「やさか」から「だて」に、「だて」から「やさか」にスタッフが行って潜入レポをする…というような企画があっても面白いよね。そうすれば、互いの病院で見たり、体験したりしたことを、伝えられる人も生まれるし。

伊達 そうだね。きっと、どちらの病院にとっても、「思っていたところと違う部分」というのが、見えてくるんじゃないかな。

小出 今はまだ広報部隊のメンバーにも「誌面に出るのは、なんだか恥ずかしいな」という人がいるんですが、僕としては、いずれは『「太郎通信」に出たい!』と言ってもらえるような媒体にしていきたいと思っているんですね。

大石 「私、ついに出られる!」と喜んでもらえるくらい、価値のあるものにしていけたらいいね。

伊達 そうだね。この社内報をツールにして、OneVETの勢いも、さらに加速させていきたいよね。

大石 本当にそうだね!

Taro Oishi

Kento Koide

両院長とスタッフや読者との間に立つ存在になれたらと思っています



うな「臨床じゃないチームを作る」ことも、社内報を作るにあたってのテーマのひとつだったので。何というか、僕たちは毎日診療をしながら、それ以外の業務は「みんなで合間にやっている」というところがあるけれど、きちんと切り離して取り組みたいという思いがあって。だから今回、広報部隊を立ち上げて、その監督的な役割を、この業界のことに通じていて、外部の視点からのアドバイスもしてくれる小出君のような人が担ってくれたのは、本当にありがたい。というのも、僕らが内側から見ているだけだと気付かないこともあるだろうし、「それ斬新だね」とか「そのほうがいいよ」といったような、彼だからこそその意見が聞けるから。

そして、「広報部隊」といえるようなチームを結成して「広報の仕事だけをする時間を作ろう」という流れができたのは、ひとつの「取っ掛け」に過ぎなくて。将来的には、人事部門だとか、経理部門だとか、企画部門だとか、もうちょっと臨床を深める部門だとか、そういった「日常の動物病院の仕事とは別の仕事に集中できる時間」というのを、もっと作っていきたくて考えているんだ。

伊達 そうだね。社内報を、そういう「大きなうねり」を伝えるツールにもしていきたいね。

『太郎通信』というタイトルに込めた思い

——ところで、「太郎通信」という誌名はかなり個性的だと思うのですが、どういった意図で決められたのでしょうか？

大石 伊達先生が社内報のネーミングを、『「太郎通信」に出たい!』と言った時、「それはやめとこうよ」って言ったのは、僕だけだったっけ(笑)? 小出君も、最初は「やめておいたほうがいい」みたいなことを言ってなかった?

小出 僕は最初、「大石先生と伊達先生の両方の名前が入っているほうがいいんじゃないかな」と思ったんですけど、考え直しました。伊達先生の強い思いを聞いて、お二人の信頼関係とか関係性というのが、なんだか「すごく素敵だな」と思って。伊達 不器用で真っ直ぐな大石先生を応援したい、ってヤツ?

小出 そう、それです! そもそもこの業界において、たとえ院長同士の仲がよくても、「2つの病院を一つの会社にしてやっていこう」という発想にはまずならないし、真似してやってみようと思っても、まず上手いかなと思うんです。でも、「やさか」と「だて」は、お互いにいい刺激を与え合いながら、着実に大きくなっていますよね。その理由というのが、伊達先生の言葉を聞いて分かった気がしたんですよ。

伊達 大石先生って、この業界では「太郎君、太郎君」って呼ばれてて、小動物の臨床の世界で、結構知られている存

Narihisa Date

